

二〇一九年一月二八日

青畝師の句碑存問す初詣
左義長の灰の裾野に残る注連
今日はしも父の命日冬日燦
寒禽の声透き通る神の森
宿り木の杉玉めける冬木立
其処此処に手締め賑はふ達磨市

二〇一九年一月二七日

灯籠につなぐ心や阪神忌
老どちら紅顔となるどんどかな
雲一朶無き高空に冬の鳶
声囁るるまでおしやべりし女正月
松過ぎてもとの退屈老い二人

二〇一九年一月二六日

推敲すどんどの灰を被りつつ
歳かさね俳句三昧女正月
五百基の陸墓見渡す冬椿
新妻と見し人小さき飾焚く
白壁に綾なす蔦の枯れ極む
炎ごし人垣揺らぐどんどかな

二〇一九年一月二五日

とんど灰句帖に降るも吉とせむ
邪の的に一矢命中弓始め

三 刀

せいじ

たか子

菜々

せいじ

智恵子

やよい

宏 虎

素 秀

なつき

菜々

満 天

もとこ

ぽんこ

菜々

はく子

よう子

うつき

三 刀

山茶花の飴玉のごと蓄みけり

大とんど臥龍となりてなほ猛る

二〇一九年一月二四日

風邪の子に添寝して本読み聞かす
鼻筋の目立つは鶺鴒の陣ならむ
あつあつのカレーに落とす寒卵
成人式祝ふ列島日本晴
波しぶき被る岬の落椿

二〇一九年一月二三日

帰宅時告ぐるチャイムや寒夕焼
寒昴月の光に負けまじと
しもやけの薬指揉む仕舞ひ風呂
初鏡老いてもお洒落忘れじと
どさと来る旅行のチラシ春隣
電線におしくらのごと寒雀
大どんど全校生徒車座に
咳するは吾を呼ぶサイン床の夫

そうけい

うつき

なつき

明日香

満 天

智恵子

さつき

せいじ

うつき

なつき

宏 虎

満 天

こすもす

さつき

なつき

毎日句会みのる選・二〇一九年一月二〇日